

2015年12月6日川越教会

## 初めに言があった

加藤 享

### 【聖書】ヨハネによる福音書1章1～5節

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

### 【序】ヨハネによる福音書の特徴

聖書教育の教案は12月から3月末まで4ヶ月間、ヨハネ福音書を学びます。マルコ福音書が紀元70年頃に書かれ、マタイ、ルカ福音書がその約10年後に書かれ、**ヨハネ福音書**はそれから20年後の**紀元100年頃**に、ギリシャに近い**エフェソ**で書かれたと言われています。

マタイ、マルコ、ルカ福音書は内容が共通する所が多く、記事の順序も一致しているので**共観福音書**と呼ばれています。ところがヨハネ福音書の内容は**大きく違っています**。先ず主イエスの誕生、バプテスマ、荒野の誘惑、また最後の晩餐、ゲッセマネの祈り、主の昇天について、何も語っていません。悪魔や悪霊につかれた人に対する癒しの言葉もありません。主の語られたたとえ話や物語も収録されていません。**主の公的活動**の場所も、共観福音書では北の辺境**ガリラヤ**が主な舞台ですが、ヨハネでは**エルサレム**と**ユダヤ**であり、時々ガリラヤに退くだけです。この**違い**の理由は何か？

使徒言行録を読むと、ペトロ始め弟子たちは**ユダヤ人**にだけ伝道していましたが、シリアの**アンティオキヤ**に**ギリシャ語**を話す人々も多数加わる**キリスト教会**が誕生し、そこからパウロの**世界宣教**が開始されるに及んで、**ギリシャ文化**の中で育ってきた人々にもわかる言葉で、**福音が語られる**ようになってきました。そのような状況の中で生まれたのがヨハネ福音書だったのです。

マタイ福音書は、アブラハムからイエスに至る長々とした系図で始まります。日本人も系図を大事にする民族ですから、私たちにとってはさほど違和感はありませんが、ギリシャ人にとっては全く理解し難い語り口だったようです。そこでヨハネは、ギリシャ人が大事にする言葉「**ロゴス**」を用いてイエス・キリストを語り始めたのでした。

## 〔1〕 神の言葉への応答

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。」言と訳されている原語は**ロゴス**です。当時のギリシャ哲学では「**内在する原理・法則**」とか「**世界を支配している宇宙理性**」を意味しました。

哲学者たちは、この世界が秩序を見事に保っていることを非常に不思議に思いました。「沢山の星が衝突せず、きちんと動いているのはどうしてか。朝夕や季節の順序が狂わないのは何故だろう。」そこで世界に**秩序**を与えてコントロールしているものを「**ロゴス**」と呼びました。更にロゴスは「魂のように宇宙の中に浸透し、それに命を与え、人間の中に理性を与えている**神の心**である」と言われるようになりました。

そこでヨハネは、この**ロゴス**を使って、ギリシャ文化の下で生活している人々に**イエス・キリスト**を伝えようとしたのです。そして「神の心であるロゴスが神と共に初めから存在し、**万物はこのロゴスによって造られ**、存在するようになった。だから世界はこのように見事な秩序と法則性があるのだ」とヨハネは書き始めたのです。

それにしても**ロゴス**という原語を、聖書の翻訳者は「原理・法則・宇宙理性」などと翻訳せず、どうして**言（ことば）**と訳したのでしょうか。それは聖書全巻の書き出し創世記の、神の天地創造に基づく信仰からでしょう。混沌としていた世界に神が「**光あれ**」とお命じになり、**光が創造されました**。そして空も海も陸もと、世界の全てのものを神は**言葉をもって**創造していかれました。

宗教によっては、荘厳な儀式や供え物を捧げることを中心にした信仰とか、厳しい戒律を守り、修業や善い行いを積んでいくことを中心にした信仰とかいろいろあります。しかし**聖書の信仰の特色**は、神の語りかける言葉を聞いて応答していくことにより、神と私たちとが**言葉でつながっていく**点にあります。

世の中には**義理**で結ばれた関係があります。**利益**で結ばれた関係もあります。しかし神は私たちと**言葉**によって結びつこうとして下さっているのです。言葉の結びつきには、聞く自由と同時に**聞かない自由**が含まれています。聞き従う自由と共に、従わない自由が認められているのです。そして神は、愛をもって静かに語りかけられます。私たちを**真実に深く愛しておられる**からです。

## 【2】神の愛の言——十字架

角川漢和辞典は「言」を「**口から表現される心**」と解説しています。そうです。私たちは心にある考えや感情を言葉で相手に伝えます。それと同じように神はご自分の心に溢れる愛を、**言**ではっきりと伝えて下さいました。それがイエス・キリストです。十字架にかけられながら「キリストなら降りてきて自分を救え」とののしる人々のために「**父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているか知らないのです。**」と祈り、彼らの救いのために死んでいかれたイエス・キリストに於いて、**神はご自分の愛を、完全に現わされました。**ですからイエス・キリストは「神の言」なのです。

シンガポールの日本人墓地には、明治時代の小説家**二葉亭四迷**の墓碑があります。彼は英語の **love** を始めて日本語に訳した人だそうです。「**あなたのためなら命を捨ててもよい**」長たらしい訳なので、使いものにならなかったようですが、**love** の本質を的確に表わしている訳ではないでしょうか。愛は単に口先だけのサービスではありません。自分の命を捨てるという行為をもって語られるものなのです。

神は私たちを真実に愛してくださっているが故に、私たちに自由を与え、私たちの自発的な応答をお待ちになります。しかし私たちの内にある**罪**が、私たちに愛の応答をさせないのです。そこで神はご自分の愛を主イエスにこめて、**生きた言**として私たちの所へ送ってこられました。そして主イエスは私たちの間であのような生涯を送り、十字架にかかって死んで下さいました。

まさに「あなたのためなら命を捨ててもよい」と二葉亭四迷が訳した通りの愛を現わす生と死を、私たちの目の前に繰り広げて下さったのです。主イエスのご生涯、とりわけその**十字架**ほど、神の愛をはっきりと語る**ことば**は、他の何処にも見出せません。十字架のイエスに神の言を見、神の語りかけを、主イエスから聞く——これが**聖書の信仰**です。

## 【結】新しい応答

丹頂鶴の親鳥が抱かなくなった卵の人口孵化に成功した丹頂鶴公園の高橋さんの証しを度々申し上げてきました。その秘訣は、最後の10日間、卵に向かって**言葉かけ**をすることです。そうすると白い卵の内側からこつこつコツコツと応答が始まり、遂に殻を破って雛が自分から出て来るのだそうです。言葉かけをしない卵は、どんなに他の条件を工夫しても、成功しません。愛を込めた**言葉が命を生み出す**のです。

私たちは今、聖書の言葉を読み、聞いています。パウロは言いました。「実に、**信仰は聞くことにより、しかもキリストの言葉を聞くこと**によって始まるのです」(ローマ 10:17) キリストの言葉を聞いている私たちの心の中には、み言葉への応答が始まっているのではないのでしょうか。

私たちの**心の応答**は、最初は自分も気付かないほどのかすかな応答かも知れません。しかしやがてそれが力強くなり、遂に固い殻を打ち破り、新しい神の子の命を持った**新しい自分の誕生**を出現させてくれるに違いありません。

キリストの言葉を**聞き続けましょう**。罪に引き回される自分が死んで、**新しい神の子の自分**が誕生する——これは神の言葉の力強い御業なのです。今日が殻を突き破って生まれ出る時だと決心できるお方は、その決心を、神にはっきりとお答えになって下さい。

祈ります：神さま、あなたは混沌とした深い闇に向かって、「光あれ」とお命じになり、この世界を創造してくださいました。あなたの命の言の素晴らしい力を賛美します。それなのにこの世界は、私たちの罪深さの故に、殺し合いが各地に起っています。憎しみと争いが愛を破壊しています。どうかあなたの愛の語りかけを、絶えず聞き続ける者にして下さい。イエス・キリストにこめられたあなたの愛の言を聞き続ける者にして下さい。命と光の救い主イエス・キリストが、一日も早く再び来て下さり、一切の悪を裁いて、神の国の栄光を確立してくださいますようお願いいたします。そのためにすべての人々に、あなたの福音を伝えていく世界宣教の業を、何にもまして励む私たちにして下さい。十字架の救い主イエス・キリストによって、お祈りします。 アーメン